

手紙

芥川龍之介

青空文庫

僕は今この温泉宿に滞在しています。避暑する気もちもないではありません。しかしまだそのほかにゆつくり読んだり書いたりしたい気もちもあることは確かです。ここは旅行案内の広告によれば、神経衰弱に善よいとか云うことです。そのせいか狂人も二人ふたりばかりいます。一人は二十七八の女です。この女は何も口を利きかずに手風琴てふうきんばかり弾ひいています。が、身なりはちゃんとしていますから、どこか相当な家の奥さんでしょう。のみならず二三度見かけたところではどこかちよつと混血児あいのこじみた、輪りん廓かくの正しい顔をしています。もう一人の狂人は赤あかと額ひたいの禿はげ上った四十前後の男です。この男は確か左の腕に松葉の入れ墨をしている

ところを見ると、まだ狂人にならない前には何か意気な商売でもしていたものかも知れません。僕は勿論この男とは度たび風呂ふろの中でも一しよになります。K君は（これはここに滞在しているあの大学の学生です。）この男の入れ墨を指さし、いきなり「君の細君の名はお松まつさんだね」と言つたものです。するとこの男は湯ひたに浸つたまま、子供のようとおに赤い顔をしました。……

K君は僕よりも十も若い人です。おまけに同じ宿のM子さん親子とかなり懇意かしゆがおにしている人です。M子さんは昔風に言えば、若わ衆しゆ顔がをしておいるとでも言うのでしよう。僕はM子さんの女学校時代にお下げうしに白いはちまき後うしろ鉢はちまき巻まきをした上、薙なぎ刀なたを習つたと云うことを聞き、定めしそれは牛うし若わか丸まるか何かなかに似ていたことだろう

と思いましたが。もつともこのM子さん親子にはS君もやはり交際
 しています。S君はK君の友だちです。ただK君と違うのは、—
 —僕はいつも小説などを読むと、二人ふたりの男性を差別するために一
 人ひとりを肥ふとった男にすれば、一人を瘠やせた男にするのをちよつと滑稽
 に思っています。それからまた一人を豪放ごうほうな男にすれば、一人
 を纖弱せんじやくな男にするのにもやはり微笑ほほえまずにはいられません。
 現にK君やS君は二人とも肥きつてはいないので。のみならず二
 人とも傷きずつき易い神経を持って生まれているのです。が、K君はS
 君のように容易に弱みを見せません。実際また弱みを見せない修し
 業ゆうぎを積たまもうともしているらしいのです。

K君、S君、M子さん親子、——僕のつき合っているのはこれ

だけです。もつともつき合いと言つたにしろ、ただ一しよに散歩したり話したりするほかはありません。何しろここには温泉宿のほかには（それもたった二軒だけです。）カツフェ一つないので。僕はこう云う寂しさを少しも不足には思つていません。しかしK君やS君は時々「我等の都会に対する郷愁」と云うものを感じています。M子さん親子も、——M子さん親子の場合は複雑です。M子さん親子は貴族主義者です。従つてこう云う山の中に満足している訣わけはありません。しかしその不満の中に満足を感じているのです。少くともかれこれひとつき一月だけの満足を感じているのです。僕の部屋は二階の隅にあります。僕はこの部屋の隅の机に向かい、午前だけはちゃんと勉強します。午後はトタン屋根に日が当

るものですから、その烈しい火照りだけでもとうてい本などは読めません。では何をするかと言えば、K君やS君に来て貰つてトランプや将碁しょうぎに閑ひまをつぶしたり、組み立て細工ざいくの木枕きまくらをして（これはここの名産です。）昼寝をしたりするだけです。五六日前の午後のことです。僕はやはり木枕をしたまま、厚い渋紙の表紙ふすまをかけた「大久保武蔵燈おおくぼむさしあぶみ」を読んでいました。するとそこへ襖ふすまをあけていきなり顔を出したのは下の部屋にいるM子さんです。僕はちよつと狼狽ろうばいし、莫迦ぼか莫迦ぼかしいほどちやんと坐り直しました。

「あら、皆さんはいらっしゃいませんの？」

「ええ。きょうは誰も、……まあ、どうかおはいりなさい。」

M子さんは襖ふすまをあけたまま、僕の部屋の縁えん先に佇たたずみました。

「この部屋はお暑うございますわね。」

逆光線になったM子さんの姿は耳みみだけ真紅しんくに透すいて見えます。

僕は何か義務に近いものを感じ、M子さんの隣に立つことにしました。

「あなたのお部屋は涼しいでしょう。」

「ええ、……でも手風琴てふうきんの音ばかりして。」

「ああ、あの気違いの部屋の向うでしたね。」

僕等はこんな話をしながら、しばらく縁先に佇んでいました。

西日にしびを受けたトタン屋根は波がたにぎらぎらかがやいています。

そこへ庭の葉はざくら桜の枝から毛虫が一匹転げ落ちました。毛虫は薄

いトタン屋根の上にかすかな音を立てたと思うと、二三度体をうねらせたぎり、すぐにぐったり死んでしまいました。それは実に呆あつ気ない死です。同時にまた実に世話の無い死です。――

「フライ鍋の中へでも落ちたようですね。」

「あたしは毛虫は大だい嫌い。」

「僕は手でもつまめますがね。」

「Sさんもそんなことを言っていていらつしやいました。」

M子さんは真ま面目じめに僕の顔を見ました。

「S君もね。」

僕の返事はM子さんには気乗りのしないように聞えたのでしよう。（僕は実はM子さんに、――と云うよりもM子さんと云う少

女の心理に興味を持つていたのですが。M子さんは幾分か拗すねたようにこう言つて手すりを離れました。

「じやまた後のちほど。」

M子さんの歸つて行つた後のち、僕はまた木枕きまくらをしながら、「大お久保武蔵おくぼむさしあがみ鐙」を読みつづけました。が、活字を追う間あいだに時々あの毛虫のことを思い出しました。……

僕の散歩に出かけるのはいつも大抵たいていは夕飯前ゆうめしまえです。こう云う時にはM子さん親子をはじめ、K君やS君も一しよに出るのです。そのまた散歩する場所もこの村の前後二三町の松林よりほかにはありません。これは毛虫の落ちるのを見た時よりもあるいは前の出来事でしょう。僕等はやはりはしやぎながら、松林の中を

歩いていました。僕等は？——もつともM子さんのお母さんだけは例外です。この奥さんは年よりは少くとも十とおぐらいはふけて見えるのでしよう。僕はM子さんの一家のことは何も知らないものの一人です。しかしいつか読んだ新聞記事によれば、この奥さんはM子さんやM子さんの兄にいさんを産うんだ人ではないはずです。M子さんの兄さんはどこかの入学試験に落第したためにお父さんのピストルで自殺しました。僕の記憶を信ずるとすれば、新聞は皆兄さんの自殺したのもこの後妻ごさいに來た奥さんに責任のあるように書いていました。この奥さんの年をとっているのもあるいはそんなためではないでしょうか？　僕はまだ五十を越していないのに髪かみの白い奥さんを見る度にどうもそんなことを考えやすいのです。

しかし僕等四人だけは何にかくしやべりつづけにしやべってました。するとM子さんは何を見たのか、「あら、いや」と言つてK君の腕を抑えました。

「何です？ 僕は蛇へびでも出たのかと思つた。」

それは實際何でも無い。ただ乾いた山砂の上に細こまかい蟻ありが何匹も半死はんししょう半生はんしょうの赤蜂あかはちを引きずつて行こうとしていたのです。

赤蜂あおむは仰あおむけになつたなり、時々裂さけかかつた翅はねを鳴らし、蟻の群むらを逐おい払つています。が、蟻の群は蹴け散ちらされたと思うと、すぐにまた赤蜂の翅や脚にすがりついてしまうのです。僕等はそこに立ちどまり、しばらくこの赤蜂のあがいているのを眺めていました。現にM子さんも始めに似に合あわず、妙に真剣な顔をしたまま、

やはりK君の側に立っていたのです。

「時々剣けんを出しますわね。」

「蜂の剣は鉤かぎのように曲っているものですね。」

僕は誰も黙っているものですから、M子さんとこんな話をしていました。

「さあ、行きましよう。あたしはこんなものを見るのは大嫌い。」

M子さんのお母さんは誰よりも先きに歩き出しました。僕等も歩き出したのは勿論もちろんです。松林は路をあましたまま、ひっそり

と高い草を伸ばしていました。僕等の話し声はこの松林の中に存ぞ

外んがい高い反響を起しました。殊にK君の笑い声は——K君はS君

やM子さんにK君の妹さんのことを話していました。この田舎いなかに

いる妹さんは女学校を卒業したばかりらしいのです。が、何でも夫になる人は煙草ものまなければ酒ものまない、品行方正の紳士でなければならぬと言っていると云うことです。

「僕等は皆落第ですね？」

S君は僕にこう言いました。が、僕の目にはいじらしいくらい、妙にてれ切った顔をしていました。

「煙草ものまなければ酒ものまないなんて、……つまり兄貴^{あにき}へ当てつけているんだね。」

K君も咄嗟^{とっさ}につけ加えました。僕は善い^い加減^{かげん}な返事をしながら、だんだんこの散歩を苦にし出しました。従つて突然M子さんの「もう帰りましょう」と言った時にはほっとひと息ついたもので

す。M子さんは晴れ晴れした顔をしたまま、僕等の何とも言わないうちにくると足を返しました。が、温泉宿へ帰る途中はM子さんのお母さんとばかり話していました。僕等は勿論前と同じ松林の中を歩いて行つたのです。けれどもあの赤蜂はもうどこかへ行つていました。

それから半はんつき月ばかりたつた後のちです。僕はどんより曇つているせいか、何をする気もなかつたものですから、池のある庭へおりに行ゆきました。するとM子さんのお母さんが一人船底椅子ひとりふなそこいすに腰をおろし、東京の新聞を読んでいました。M子さんはきようはK君やS君と温泉宿の後ろにあるY山へ登りに行つたはずです。この奥さんは僕を見ると、老眼鏡ろうがんきょうをはずして挨拶あいさつしました。

「こちらの椅子いすをさし上げましょうか？」

「いえ、これで結構です。」

僕はちようどそこにあつた、古い籐椅子とういすにかけることにしました。

「昨晚はお休みになれなかつたでしょう？」

「いいえ、……何かあつたのですか？」

「あの氣の違つた男の方がいきなり廊下ろうかへ駈かけ出したりなすつたものですから。」

「そんなことがあつたんですか？」

「ええ、どこかの銀行の取りつけ騒ぎを新聞でお読みなすつたのが始まりなんですって。」

僕はあの松葉の入れ墨すみをした気違いの一生を想像しました。それから、——笑われても仕かたはありません、僕の弟の持っている株券かぶけんのことなどを思い出しました。

「Sさんなどはこぼしていらつしやいましたよ。……」

M子さんのお母さんはいつか僕に婉えんきよく曲まがにS君のことを尋ね出しました。が、僕はどう云う返事にも「でしよう」だの「と思います」だのとつけ加えました。（僕はいつも一人ひとりの人をその人としてだけしか考えられません。家族とか財産とか社会的地位とか云うことには自然と冷淡になつています。おまけに一番悪いことはその人としてだけ考える時でもいつか僕自身に似ている点だけその人の中から引き出した上、勝手に好悪こうおを定めさだているの

です。）のみならずこの奥さんの気もちに、——S君の身もとを調べる気もちにある可笑おかしさを感じました。

「Sさんは神経質でいらつしやるでしょう？」

「ええ、まあ神経質と云うのでしよう。」

「人ずれはちつともしていらつしやいませんね。」

「それは何しろ坊ちゃんですから、……しかしもう一ひと通りのこととは心得ていると思ひますが。」

僕はこう云う話の中にふと池の水みづぎわ際に沢蟹さわがにの這はつているのを見つつけました。しかもその沢蟹はもう一匹の沢蟹を、——甲羅こうらの半ば砕けかかったもう一匹の沢蟹をじりじり引きずつて行くところなのです。僕はいつかクロポトキンの相互扶助論そうごふじょろんの中にあ

った蟹の話の思ひ出ししました。クロポトキンの教えるところによれば、いつも蟹は怪我けがをした仲間を扶たすけて行ってやると云うことです。しかしまたある動物学者の実例を観察したところによれば、それはいつも怪我けがをした仲間を食うためにやっていると言ふことです。僕はだんだん石せき 菖しょうのかげに二匹の沢蟹の隠れるのを見ながら、M子さんのお母さんと話していました。が、いつか僕等の話に全然興味を失っていました。

「みんなの帰って来るのは夕がたでしよう？」

僕はこう言つて立ち上りました。同時にまたM子さんのお母さんの顔にある表情を感じました。それはちよつとした驚きと一しよに何か本能的な憎しみを閃ひらめかせている表情です。けれどもこの

奥さんはすぐにも静かに返事をしました。

「ええ、M子もそんなことを申しおりました。」

僕は僕の部屋へ帰つて来ると、また縁えんさき先の手すりにつかまり、松林の上に盛り上つたY山の頂いただきを眺めました。山の頂は岩むらの上に薄い日の光をなすつています。僕はこう云う景色を見ながら、ふと僕等人間を憐みたい気もちを感じました。……

M子さん親子はS君と一しよに二三日まえ前に東京へ帰りました。

K君は何でもこの温泉宿へ妹さんの来るのを待ち合せた上、(それは多分僕の帰るのよりも一週間ばかり遅れるでしょう。) 帰り仕度したくをするとか云うことです。僕はK君と二人だけになった時に幾分か寛くつろぎを感じました。もつともK君いたわを劬いたわりたい気もちの反かえつ

てK君にこたえることを^{おそ}懼れているのに違いありません。が、とにかくK君と一しよに比較的^{きくらく}気楽に暮らしています。現にゆうべも風呂^{ふろ}にはいりながら、一時間もセザアル・フランクを論じていました。

僕は今僕の部屋にこの手紙を書いています。ここはもう^{しよしゆ}初秋にはいっています。僕はけさ目を醒^さました時、僕の部屋の障^{しよ}子^{うじ}の上に小さいY山や松林の逆^{さか}さまに映っているのを見つけた。それは勿論戸の節^{ふしあな}穴からさして来る光のためだったので。しかし僕は腹ばいになり、一本の巻煙草をふかしながら、この妙に澄み渡った、小さい初秋の風景にいつにない静かさを感じました。……

ではさようなら。東京ももう朝晩は大分だいぶしの凌ぎよくなっているでしょう。どうかお子さんたちにもよろしく言っ下さい。

(昭和二年六月七日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月3日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

手紙

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>